

木原歴史文化街道

米原市の歴史・文化財を歩く ⑨5

市内の雨乞い伝承

— まいばら水の歴史④ —

雨乞い

農耕を中心とする日本の社会において、水不足をひきおこす早魃は最大の悩みです。そのため雨乞い行事は集落の重要な共同祈願で、さまざまな方法でおこなわれました。主なものに、参籠、水種貰い、貫い火、

神を怒らせる(池・沼・淵の水をかき回す、汚物を洗う)、榊洗い、鐘沈め、地藏沈め、女相撲、千度垢離、千把焚き、雨乞い踊り、太鼓踊り、雨乞い大般若、雨乞い念仏などがあり、効果がなければ二種以上の儀礼を重複し、繰り返し長期にわたっておこなわれ、ときには、他村と連携して広域化することもありました。

さまざまな雨乞い行事は、市内各地の伝承のなかで見ることができません。社寺に籠る「参籠」は雨乞いが必要とするほとんどの集落でまずおこなわれるもので、氏神に三日三晩

籠り、それでも効果がないうときは、上野や弥高では、伊吹山中の社寺を巡っています。聖地から水をもらってくる「水種貰い」では、遠く多度大社(三重県)や夜叉ヶ池(福井・岐阜県境)からご神水を迎えたことが柏原や弥高で伝えられています。

昭和四三年、伊吹山二合目の松尾寺境内から釣鐘(二四九八年銘)が出土しましたが、これも聖地に鐘を沈める理める(雨乞いに伴うものといわれています)。釣鐘の吊り下げの部分で龍頭といい、龍の彫刻が施されていて水を呼ぶと考えられました。鐘を池に沈める行事は日光寺でもおこなわれました。東谷の奥にある権現堂は、甲津原の洗面川での雨乞いがあります。甲津原には10面の能面が伝えられています。集落内を流れる姉川(洗面川)のナンバラ石の上に能面

を置き、笹で川の水を振りかけると、どこからともなく白い鳥が舞い飛び、やがて雨が降るそうです。今でも能面を出すと雨が降るといわれ、大切に保管されています。山津照神社能登瀬(の宝物である「鉞」も出すと雨が降るといわれています)。

火を焚いて雨をよぶ

山上で火を焚く雨乞いも各所でおこなわれました。上野の太鼓踊りでは、野良着の大松明が先頭を練ります。これは、早魃のときに伊吹山頂の弥勒堂前で松明をつがえて「千把焚き」をおこなった様子を再現したものです。番場では三日三晩祈願して雨がないうちに、龍宮山の頂上で付近の木を伐採して大火を焚きました。その火は長浜でもみることができ「番場の雨乞い祈願でいまに雨が降る」と期待されたそうです。枝折では阿弥陀嶽で火が焚かれました。箕浦では各家からワラを四束ずつ持ち寄り、天野川の河原で燃やして雨乞い祈願が行われています。火を焚くことで上空に気流を起し雨をよびます。

さて、雨乞いの場所としてよく知られているものに「雨壺さん」があります。関ヶ原町今須の雨壺さんへは、大野木・柏原などから祈願に行

っていますし、同じ霊仙山には梓河内からの登山道を途中で分かれ、黒谷の源流に向かうと岩の下から水が湧き出ているところがあり雨壺とよばれています。日照りのとき、お坊さんの夢枕に「南の高い山に霊泉がある。その竜王が天に上りたくても黄金の蓋が重たくて難儀している」とのお告げがあり、村人を引きつれ蓋を取り除いたところ、泉から金色の小さな蛇が姿を現し、たちまち大雨になったとの伝承があります。柏原の水竜山にも八大竜王を祀る雨壺があります。伊吹地域では、伊吹山の岐阜県側にある戸谷(明神)の岩屋に、上野・清水・藤川・寺林が雨乞い祈願をおこなっています。戸谷への参拝は非常に困難だったために、清水では一七〇四年に上平寺城がある尾根の中腹に勧請し、さらに山麓に移されたあと、昭和初期に泉神社に合祀されました。

(歴史・文化財保護室)



▲河内の雨壺さん